

1. 板東のドイツ兵捕虜と櫛木への遠足

井戸慶治

本稿は、板東俘虜収容所のドイツ兵捕虜による遠足、とりわけしばしばおこなわれた櫛木（くしぎ）海岸への遠足を扱う。この活動は、彼らの収容所新聞『ディ・バラック』において、この地域とその住民、及び捕虜と住民との交流についての若干の生気に満ちた記事が書かれる契機となった。そうであるがゆえにこれを取り上げることは、外国人による四国地域の描写を主要テーマとする本プロジェクト全体の趣旨にも適うと思われる。

捕虜生活と遠足

板東収容所は、松江豊寿所長の寛容な管理方針のもとで捕虜たちの多彩な文化活動や経済活動が活発におこなわれたことでよく知られている。しかしそうであっても、そこにいた捕虜はやはり捕虜であることに変わりはなく、基本的に自由がなく、家族や友人、恋人など親しい人に会うことのできない制約の多い生活を強いられていたということは確認しておかねばならない。『ディ・バラック』第3巻には「鉄条網病」(Stacheldrahtkrankheit)という表題の記事(III, 289–291)¹がある。「鉄条網病」とは、第一次世界大戦当時各国で抑留されていた捕虜たちに共通して見られる精神疾患に彼らが与えた呼称であり、この記事は、スイス人の医師 A. L. フィッシャー博士の『鉄条網病 捕虜心理学への寄与』(チューリヒ、1919) から、捕虜の精神状態の特徴を要約している。それによれば、捕虜収容所では多くの男がひとつの場所にいて有用な労働の機会がなく、性的な生活局面が欠けている。さまざまな刺激のある外の世界との接触がなく、それによって無気力無関心が惹き起こされる。また、大人数での長期の窮屈な同居により、ひとりで過ごす時間がなくなり、それが「自分自身の中での休息」を妨げるとされる。人間関係にも影響があり、「豚の半身を覗くように」同胞を眺めるようになり、些細なことに腹を立て、しばしば仲間同士で激しい言い争いや暴力の行使が生じることになる。若干の捕虜には精神障害が起こり、集中力や記憶力が減退し、不眠や悪夢に悩まされることもある、というのである。

板東の捕虜たちにとっては特に無気力無関心になることへの対策が重要であり、『ディ・バラック』の「終刊の辞」では、この捕虜新聞自体の目的もこうした精神状態の比喩的表現である「灰色の幽霊」との戦いであったと想起されている。

¹ *Die Baracke. Zeitung für das Kriegsgefangenenlager Bando, Japan. 1917 – 1919.* 引用においては以下の翻訳を使用し、() 内に巻数をローマ数字で、ページ数をアラビア数字で表記する。『ディ・バラック』1–4 巻、鳴門市ドイツ館史料研究会訳・編集、1998–2007 年。

その目標とは、戦争捕虜たちに四方八方から忍び寄ってくる灰色の幽霊たちに対する戦いであった。それは感覚の鈍磨と精神的荒廃に対する戦いであり、全体にとっては鉄条網の外側の、個人にとっては自己自身の外側のすべてのものに向う意志・関心の喪失に対する戦いである。(IV, 533)

捕虜たちの諸々の文化活動やスポーツなどは、知力や体力を解放後の社会復帰に向けて維持向上させるためのものであったが、気晴らしの手段でもあり、それはこうした無関心状態に陥ることへの集団的、意識的対策と見ることもできる。特に 1918 年 11 月の停戦後、捕虜たちは一刻も早く故郷に帰りたく思い、自由を求めている。しかし、ヴェルサイユ条約が締結された翌年 6 月以降も、帰国のための輸送船がなかなか調達されず、彼らのストレスが昂じており、アルコール依存症になった者もいた。

散歩や遠足といった外出もまた、重要な気晴らしの機会であり、そうした精神状態への有効な対策だったと言ってよい。板東収容所では、特に停戦となってから散歩や遠足の回数や自由度が増えている。では、管理する側にとって捕虜のこうした外出はどのような意味を持っていたのか。『大正三年乃至九年戦役俘虜取扱顛末』²「俘虜収容所長同席における陸軍大臣口演要旨」(大正五年九月十九日)二、警戒及び取締について、には次のように記されている。

9. 俘虜をして外出せしむるは、健康保全並びに取締上の目的に出でざるべからず。故に構内狹隘にして且近傍に適当なる広場なく、又はその他の事故により運動に不足を感じずる場合において、閑居不逞の念を起すを防止するがために、時々外出をなさしむべきものにして、しかもその外出地域はなるべく地方人民との接触を避け、交通頻繁ならざる地区を選ぶを要す。然るに往々俘虜を温泉に導き、遊園地を逍遙せしめ、あるいはしばしば海水浴場に導くが如きは、むしろ優遇に過ぐるものにして、俘虜を以て恥辱とする我国風に対し悪影響を貽すものと言うべし。注意せざるべからず。

これによれば、外出は「閑居不逞の念を起すを防止するがために」時々おこなわせるべきものとして、抑留による捕虜たちの欲求不満の解消、ガス抜きの意味があり、収容所を安全に管理するための一方法のように見える。「閑居不逞の念」という文言が幾度も見られるこの『顛末』などの陸軍文書類からは、こうした目的のための手段として、捕虜の労役、講座などによる捕虜相互の教育、文化的な諸活動なども考えられていた節が垣間見える。しかし捕虜の外出による住民との接触は、「俘虜を以て恥辱とする我国風」に対し悪影響があるとして、制限されるべきものとも考えられている。とは言え、こうした軍上層部の考えは、すべての収容所に徹底されていたわけではない。日本軍の縦割り制度により、各収

² 陸軍省『大正三年乃至九年戦役俘虜に関する書類』俘虜情報局「大正三年乃至九年戦役俘虜取扱顛末」防衛省防衛研究所所蔵。

容所は師団や地域の駐屯軍（衛戍）のもとにあり、その管理方法は各所長、管理部の自由裁量に任された部分が大きかった。そのため、「外出は可成之を制限する方針」³ という収容所もあれば、日露戦争時のように捕虜を「温泉に導」くことまではないにしても、「海水浴場に導く」ようなことをおこなった板東や大分の収容所もあった。

板東収容所における遠足、散歩

板東では、1917年4月の開所からしばらく後の5月27日に、数百メートル離れた大麻比古神社への最初の散歩がおこなわれている。その後収容所周辺への散歩、遠足が幾度か実施された後、11月30日には現在の鳴門市の中心部である撫養（むや）への遠距離の遠足が実施され、1918年になると撫養の他、大坂峠（10月22日）など収容所北方の山々への遠足もおこなわれている。ただしこの時点ではそれほど回数は多くない。これは、板東収容所の前身のひとつでやはり松江が所長をしていた徳島収容所で遠足が週2回だったことや、後の板東でも1919年には同じ頻度で実施されていることからすると、やや奇異に感じられる。しかし、散歩、遠足と呼ばれていないだけで、板東収容所の捕虜たちの外出の機会は多かった。近くは、収容所南側に管理部が借り受けた土地に整備された運動場でのサッカー、テニスなどのスポーツであり、またそれに隣接する土地での野菜の栽培や畜産（家禽、豚など）である。また大麻比古神社の近辺でおこなわれた地域住民のための橋梁や道路の建設⁴がある。さらには、物価高騰に対して燃料費節減のためにおこなわれた周辺の山での木の伐採と運搬の作業である⁵。こうした作業やそれを口実とした外出により、捕虜たちは身体の運動や周辺の自然美を味わいながらの気晴らしをすることができ、改まった形での散歩、遠足はそれほど必要なかったと考えられる。陸軍の捕虜関連の公式文書である『欧受大日記』⁶大正八年三月、二月中における旬報其他の通報などより得たる事項、五、所外散歩其他の運動、にはそれを証する次のような報告がある。

3. 板東収容所においては本月中旬以来俘虜一般の所外散歩を左の如く実施せり。

一回約百五十人以内まで（将校総数の四分の一、下士卒八箇班）を順次同一箇所に引率散歩せしめ、七回（約一ヶ月間）の後全員の散歩を修了する如く規定し、一回の時間を三時間以内とす。而して俘虜中一廠舎（しょうしゃ）長に散歩参加の予選人員を報告せしめ、散歩に関する臨時発生する注意事項の伝達をなさしめ且、該廠舎長は毎回勤務として散歩団と同行せしむ。右の如くして爾来五回実施せしが、全員ともにこの挙を大い

³ 注2の『顛末』第四節、取締、第三款、各俘虜収容所における取締状況、其五、俘虜の起居及び勤務、八、松山収容所。

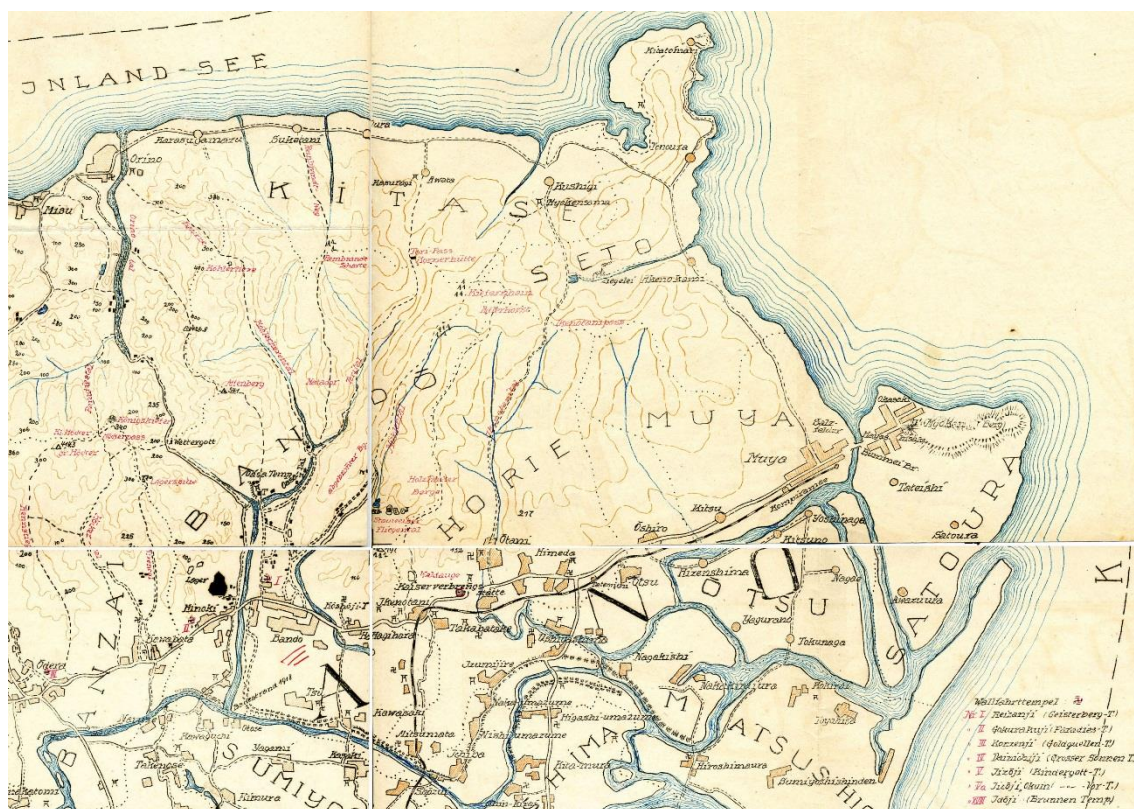
⁴ 『ディ・バラッケ』の記事「二年間の橋梁建設」（IV, 462 - 470）を参照。また以下の綿密な論考により、この記事に記されている橋梁に連結した道路の造成も捕虜によってなされていたことが実証された。佐藤征弥・種ヶ嶋絵理・網田克明・川上三郎「板東俘虜収容所のドイツ兵が大麻比古神社境内に造った橋と公園」『徳島大学地域科学研究』5巻、2015年、10-32頁。

⁵ 『ディ・バラッケ』の記事「きこり団創設1周年に寄せて」（IV, 268 - 270）を参照。

⁶ 防衛省防衛研究所所蔵。

に喜び、近く将来解放の期を楽しむと同様多大の慰安を享くこととなり、従来当所においては所外散歩は数多く実施せざりしも、昨年二月薪伐採班を設けたる以来満一ヶ年以上事故なかりし経験ありしを以て、今回この要領に従い実施せるものにして、従来伐木班は彼らに取り唯一の所外慰安物として全員のこの編成に加えられんことを希望せし所なるも、約八十名（二組として各組は確実に労役せしむ）にして全般的ならず。之が為、伐木用具たる鋸斧等を自弁し、且所内の雑役を他の俘虜に代理せしめ得る程度の資力を有する俘虜に限られありし関係上、今回のこの挙は全般が若干の自由を得るに至りしものなり。

1918年から翌年にかけて、捕虜たちは20人程度の小さなグループで収容所周辺の山や平地を探索し、いろいろな道を歩き回るようになる。築城曹長カリウスは、収容所を含む板野郡の四万分の一の地図〔下にその一部を提示〕を作成しており、そこにはそうした探



索の成果が点線で描かれたルートによって示されている。この地図や『ディ・バラック』の記事から、捕虜たちは途中訪れた場所について彼らなりのドイツ語地名をつけていることがわかる。例えば収容所（地図上では黒いしみようになっていて Lager と表記されている）の真北にある大麻山は猿が多く見られたのか Affenberg（猿山）と名づけられ、収容所から北北東に向って瀬戸内海側に抜ける道には Rembrandt-Weg（レンブラント道）、Rembrandt-Scharte（レンブラント尾根）などの名が付いている。おそらく繁茂した樹木が道を覆い、レンブラントの作品のような陰影のある景観を呈していたのであろう。カリウス

の地図では、散歩のルート以外でも例えば四国八十八箇所の寺の名前について、右下凡例部分に独訳された名称が併記されている。一番札所の霊山（りょうぜん）寺は地元の人々の発音にしたがって Reizanji と表記され、さらに直訳調で Geisterberg-Tempel と記されている。同様に二番の極楽寺は Paradies-T. 三番金泉寺は Goldquellen-T. 四番大日寺は Großer Sonnen T. 五番の地藏寺は Kindergott-T.（子供の神の寺）とやや意識しているといった具合である。なお、右上の部分の海中には実際には大毛島、島田島などがあるのだが、当時軍事的に機密保持を要する要塞地帯であったため、削除されている。捕虜がしばしば訪れた櫛木海岸は北東側に突き出た岬の西南にあるが、ここでの撮影も同じ理由で許可されなかったもので、捕虜が撮った櫛木の写真はほとんど残っていない。

従来の遠足では、捕虜たちを監視するために警官と銃剣を持った衛兵が付き添っていたのであるが、1918 年 10 月の大坂山行きからは衛兵はいなくなり（III, 58）、1919 年 1 月 7 日の猿山（大麻山）への遠足の記録では、「ことにわれわれが大いに喜んだのは、監視も監督もなしで、神の与えてくれた自由な自然を楽しむことができることがわかったときだった」（III,324）と書かれている。1 月 10 日の散歩では、「奇妙なことに、帰りに警官がいな

くなったので、高木大尉の要望で、これからは同行者の人数も自分たちで数えることになった」（III,324）。こうして散歩や遠足のあいだ、捕虜たちはかなりの自由を味わうことができるようになる。

左の表は、『ディ・バラック』第 4 巻の記事（IV, 268）として掲載された 1919 年前半に実施された遠足に関するデータを翻訳版からコピーしたものである。原文に従えば、右下の「終日遠足の合計、終日遠足の平均」のところは「終日遠足」を「散歩」に訂正すべきである。

板東俘虜収容所で実施された
散歩と終日遠足に関する半年間の統計
1919 年 1 月～6 月

No.	日付	km 概数	参加者数			No.	日付	km 概数	参加者数		
			将校	兵卒	計				将校	兵卒	計
							繰り越し	435	197	2962	3163
1	1 月 7 日	10	9	103	112	22	3 月 25 日	16	5	24	29
2	10	18	10	112	122	23	4 月 1 日	32	11	152	163
3	13	15	12	132	144	24	4	17	3	21	24
4	15	14	7	134	141	25	8	32	10	188	198
5	17	20	18	237	255	26	11	14	4	39	43
6	21	32	9	224	233	27	18	12	4	28	32
7	29	17	10	157	167	28	21	28	11	530	541
8	31	15	7	63	70	29	25	16	5	41	46
9	2 月 5 日	17	12	141	153	30	28	40	8	116	124
10	7	15	17	148	165	31	5 月 2 日	10	6	22	28
11	12	16	14	119	133	32	6	30	10	216	226
12	18	40	10	216	226	33	9	12	3	19	22
13	21	15	3	57	60	34	16	40	7	112	119
14	24	18	10	125	135	35	23	30	11	162	173
15	26	17	7	139	146	36	26	12	2	23	25
16	28	12	6	67	73	37	29	28	10	459	469
17	3 月 4 日	35	14	350	364	38	6 月 3 日	28	9	92	101
18	7	20	5	47	52	39	9	28	10	94	104
19	14	40	10	171	181	40	20	28	11	74	85
20	18	19	2	28	30	41	25	30	11	142	153
21	21	30	5	196	201	最終合計		918	348	5520	5868
繰り越し		435	197	2966	3163	終日遠足の合計		367	181	2026	2207
終日遠足の平均		32.4	10	206	213	終日遠足の平均		15.3	8	84	92

太字の番号は終日遠足を示す

これ以降 10 月までにおこなわれた遠足についても『ディ・バラック』の記事などにもとづいて挙示しておく。

1919 年 7 月～10 月

7 月

- 9 日 第 18 回終日遠足 櫛木。
- 16 日 第 19 回終日遠足 櫛木。
- 21 日 第 20 回終日遠足 大須（通算 1,000 km）。
- 25 日 第 21 回終日遠足 櫛木。
- 29 日 第 22 回終日遠足 櫛木。

8 月

- 4,7,13,15,18,21,25,28 日 第 23～30 回終日遠足 目的地はすべて櫛木。
- 13 日の第 25 回終日遠足では、水泳大会が実施された。

9 月

- 1 日 第 31 回終日遠足 櫛木（参加者通算一万人突破）。
- 5,9,17,19,23,26 日 第 32～37 回終日遠足 目的地はすべて櫛木。

10 月

- 3,7,10,12,15,19,21,24,26 日 第 38～47 回終日遠足 目的地はすべて櫛木。

これらのデータによれば、1919 年の 1 月から 10 月まで、「終日遠足」だけで 47 回、「散歩」と合わせた合計は 70 回で、平均 4 日に 1 回実施されたことになる。距離は 10km から 40km までで、「終日遠足」は 28km 以上、最長は 40km に及んでいる。表で散歩(Spaziergang)と表記されているものは、記事によっては「終日遠足」(Tagesausflug)ではない単なる「遠足」(Ausflug)と特に区別されていないようであるが、20km 以下のものという規定があるようだ。それを越えるものが「終日遠足」ということなのだろう。交通機関の発達していない当時、しかも兵隊であるから行軍は仕事の一部だったと言えるかもしれないが、それにしても行った先で水泳をしてまた収容所まで戻ってくるし、楽隊もついていてそのメンバーは吹奏しながら長距離を歩くのである。相当の健脚と言わねばならない。

1919 年 1 月 21 日に最初の「終日遠足」がおこなわれ、瀬戸内海側の漁港である大浦、栗田、櫛木に行っている (III, 325)。終日遠足の主な道程（目的地）は、西北コース（香川県の坂本）、北コース（折野）、東コース（撫養方面）。北東コース（櫛木）の四つである。参加者数については、22 名から 541 名で、最も多いときは収容所の半分の人数に及ぶ。捕虜たちのお気に入りの目的地は、他を圧倒して櫛木である。現在国道 11 号線を徳島から北上すると瀬戸内海に至る地点があるが、櫛木はその周辺である。板東の捕虜たちは、6 月 25 日から 10 月 26 日まで、1 回の例外を除いて 29 回櫛木を訪れていて、これも約 4 日に 1 回の割合である。往復の全行程は約 30km であり、途中で山道もある片道 15km を捕虜たちは 2 時間半で踏破している。櫛木へのルートは、大麻比古神社の北東の谷から「鳥居谷」を抜

けるコースと、大谷（先に掲げたカリウスの地図では、収容所の東方の比較的大きな集落の印がある）から「池谷の谷筋」を抜けるコースの二つがあり、参加者が多い時などは、二手に分かれて進んだこともあった。遠足途中の山中を行く写真を掲げておく。日本人の付き添いがあるので、おそらく 1918 年までのものである。



ライポルトのアルバムより(鳴門市ドイツ館所蔵)



ギンシュマンのアルバムより(鳴門市ドイツ館所蔵)

海水浴と水泳大会・風景美



『ディ・バラック』の遠足記、特に櫛木を扱ったものは明朗な調子で書かれており、読む者にも書き手のそうした気分がおのずと伝わってくる。

「櫛木 届かなかった手紙」という記事の冒頭に掲げられた左の挿絵(IV, 389)もまた、それに相応したものである。ここではこの記事などからいくつかの箇所を取り上げてみる。まずはユーモア交じりの大仰さで、「櫛木は日本の四国の北岸にあり、アジアで最も重要な海水浴場」であるとい

う。そして、「これほどの隆盛を見るようになったには誰のおかげか」といふと、まさにわが国の人々、極東のドイツ人開拓者」すなわち「われわれ板東の捕虜」の力の賜物だといふのである。

われわれは、それまでさして見栄えもしなかったこの場所を発見した。そして週に2回そこまで延々と歩いて、水浴というより浜辺の活動を展開することによって、その地の発展のきっかけを与えたわけである。というのも水浴は残念ながら禁止で、「足洗い」しか許されなかったからである。(IV, 390)

実際には、彼らが櫛木を訪れた主目的は海水浴であった。公式には水泳は禁止されており、収容所管理側が建前上「足洗い」のためと称していたので、捕虜たちも面白がってそれに倣ったのである。遠足の責任者であったブッターザック大尉らに捧げられた「第25回終日遠足に」という詩の中では、「『足洗い』のため / 海水パンツを入れる」(IV, 397)という一節がある。日本人ならば通常海水浴は8月で終わるのだが、彼ら捕虜たちは秋も深まる時期までここで泳いだのである。砂浜ではなく石の多い海岸で、海水浴場としてはあまり適切などころとは思えないのであるが。海水浴については、海のある北部出身者と内陸部の出身者がそれぞれの仕方で楽しんだことが描写されている。

われわれの人生の長さが、一方で抑留によって5年間削られはしたが、他方で分別あるくらし方によって、特に戸外での運動によってこの間に数年分伸びたとすれば、それは

ほとんど櫛木のおかげである。われわれは今後何年間か、捕虜の身にもかかわらずとても心地よい気分浸ったあのわずかな美しい折々を、物悲しい気持ちで幾度か思い起こすことだろう。以前から海に親しんでいた者は、櫛木の浜で気持ちのよい海水に入ってまるでわが家にいるようにくつろげた。内陸にいた者は、目新しい美しいものを楽しんだ。誰もが自然に帰って爽快であった。(IV, 502「収容所漫筆」)

その他、舟遊びや海岸での料理、パーティ、水泳大会などもおこなわれた。



櫛木の西方にある大須付近で撮られた写真(鳴門市ドイツ館所蔵)

1919年8月13日の第25回終日遠足では水泳大会が実施された。捕虜たちは収容所を7時に出発し、9時30分に櫛木に到着して10時に競技が開始された。以下にプログラムを対訳の形で挙げておく。

水泳大会プログラム(鳴門市ドイツ館所蔵)

PROGRAMM FÜR DEN WASSER- SPORT		
BEGINN	ETWA	10 UHR
1. Brustschwimmen	50m	
2. Seitenschwimmen	50m	
3. Schwimmen der Alten Herren (über 30 Jahre, beliebig)	50m	
4. Rettungsschwimmen (humoristisch)	—	
5. Teller tauchen (15 Teller)	—	
6. Hauptschwimmen (beliebig)	100m	
PAUSE (etwa 1 Stunde)		
7. Rückenschwimmen	50m	
8. Hand über Hand-Schwimmen	50m	
9. Streckentauchen (gewertet wird Parallel zur Bahn)	—	
10. Anfängerschwimmen (beliebig)	50m	
11. Hindernisschwimmen (über 1 Boot und über 1 Fass)	50m	
12. Stafette (Brust-, Seiten-, Rücken- Hand über Hand-Schwimmen) je 50m		
12a. Herausforderungs-Stafette Alter Herren (beliebig) je 50m		
KRIEGSGEFANGENENLAGER BANDO JAPAN-AUGUST 1919.		

1. 平泳ぎ。50 メートル
 2. 横泳ぎ。50 メートル
 3. シニアの競泳。(38 歳以上。
自由型) 50 メートル
 4. 救助泳法 (ユーモラスに)
 5. 皿取り潜水 (15 枚)
 6. メインレース(自由型)。
100 メートル。
休憩 (約 1 時間)
 7. 背泳ぎ。50 メートル
 8. クロール。50 メートル
 9. 潜水距離競泳。コース直
進距離で評価
 10. 初心者競泳 (自由型) 50
メートル
 11. 障害競泳 (ボートと樽を
乗り越えて) 50 メートル
 12. メドレーリレー (平泳ぎ、
横泳ぎ、背泳ぎ、クロール)
各 50 メートル
 - 12a. シニアが挑戦するリレ
ー (自由型) 各 50 メートル
- 板東俘虜収容所
日本、1919 年 8 月

プログラムの中で特徴的なものを挙げておく。横泳ぎや障害走ならぬ障害競泳が入っていて、バタフライがまだないようである。初心者やシニア組の競技もあって、各人の能力に応じてできるだけ多くの参加者に楽しんでもらおうという工夫が見られるが、これは他のスポーツや体操でもなされたことである。「救助泳法 (ユーモラスに)」 Rettungsschwimmen (humoristisch) では、おそらく溺れ役と救助役とで笑いを誘う演技をしたのであろう。皿を 15 枚海中に投げ込んでそれを何枚取れるかを競う「皿取り潜水競技」もある。この水泳大会を扱った記事(『ディ・バラック』IV, 401 以降。「瀬戸内海櫛木海岸における水泳祭 1919 年 8 月 13 日」)によれば、競技への参加については事前申し込み制であった。また、「[捕虜の] 委員会と漁師たちとの長い交渉の末に、8 月 13 日に海を水泳祭典のために空けてもらえることになった」とある。収容所管理部の仲介なしに、地元住民との直接交渉がなさ

れたのかもしれない。『ノンアルコール』飲料を提供する海の家『荒くれゴットリーブ』にソーセージ店、菓子舗ゲーバ、コーヒーサービス、二つの吹奏楽団による野外演奏によって、いやが上にも祝祭の色彩が高められることとなった」という一文もある。「ノンアルコール」がなぜ括弧付きなのだろうか。もしかすると表向きは禁止されていたのに、実際にはビールなどが販売されていたからかもしれない。

瀬戸内海の自然の美しさや途中の山から望むパノラマ風景も、ふだんは収容所の中で暮らす捕虜たちにとってはとりわけ魅力的なものであった。

船の行きかう瀬戸内海の広い景色。透明な水。海岸のすばらしい老松とその合間に見える藁葺き屋根の漁師小屋と浜に引き上げられたすらりとした漁船の形。これらすべてにほのかに世界から隔絶された地のおいがあり、手つかずの自然の息吹きがある。[……]しかし、最も美しい風景美を見せるのは、行き帰りの道を通らねばならない峠からの眺めである。眼前の広い海は弧を描く向かいの海岸まで広がり、さらに目を山と丘を越えて谷に向けると、そこにはため池やたくさんの村があり、まるでかわいいおもちゃのように緑の広がる田んぼの中に横たわっている。われわれ鉄条網の古参兵にとってこの無限に広がる眺めはなんと心地よいことか。(IV, 392)

さらに捕虜たちが山中の道で時折出会う「美しき水車小屋の娘」は彼らの人気の的であり、『ディ・バラッケ』の中で何度か言及されている。現在「ドイツ橋」と呼ばれている石橋が完成したときの儀式のさいにも彼女は現れ、「橋造りたちにとっても好かれ待ち焦がれられた『美しき水車小屋の娘』」(die bei den Brückenbauern so beliebte und begehrte „schöne Müllerin“)と呼ばれている。

地元住民との交流

櫛木への遠足記をさらに興味深いものにしているのが、地元の人々との交流の描写である。記事「櫛木 書かれなかった手紙」他から、いくつかの特徴的な文章と挿絵を引用する。まずは、しばしば訪れるようになったドイツ人の集団に対して、日本語ではなくドイツ語の挨拶が呼びかけられるようになることについて。

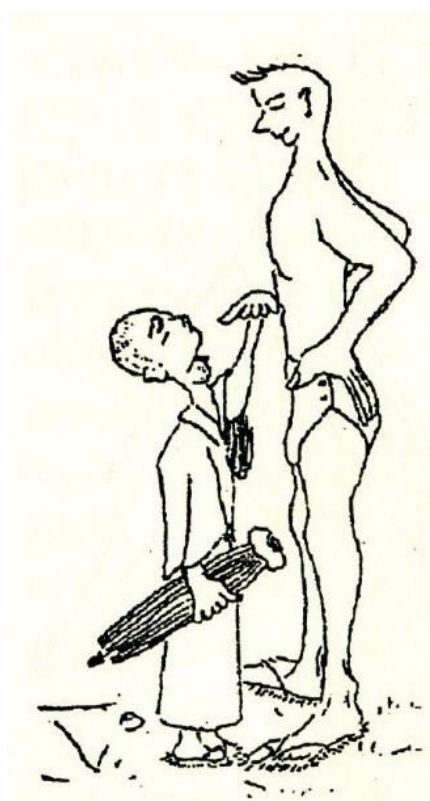


ドイツ語圏はとうの昔に櫛木にまで広がっている。以前は、『こんにちは』と『おはよう』が、われわれに挨拶する名誉をめぐって争っていただけだ。今や、われわれがやってくると『グーテン・モルゲン』と『グーテン・ターク』の声がひっきりなしに迎えてく

れる。[・・・・] ちょっと前に驚いたのは、ちび助が『グーテン・モルゲン、パパ』と呼びかけたときだ。われわれのうちの誰のことだろう。身に覚えがないと誰もが言い張ったが。」（IV, 393. 挿絵はIV, 392）

しかしまた、捕虜たちの需要に応じて住民たちは旺盛な商売気も見せるのであった。

ある点で櫛木は、オステンデやビアリッツ、ブライトン〔いずれもヨーロッパの有名な海岸リゾート地〕と似ている。それは物価だ。[・・・・] 漁師たちは、魚群の突然の出現に対応できるとぎすまされた眼力を持つので、われわれの長い隊列の先頭が視界に入るやいなや、網を投げ、獲物を確保しようと急いでやってくる。網というのは、村から浜まで運んできた井戸水の入った桶、果物、卵、鉱泉、ビール、ケーキ、魚、マットに麦のサンダル〔草履〕を入れたかごである。そして網にかかる獲物というのは、われわれが支払うびかびかの硬貨とあまりびかびかとは言えぬ紙幣である。― 最近、ある婆さんと何尾かのカレイの値段交渉をしたとき、ここの人々がどうやら短時間で金持ちになりたがっているのがわかってどなっていると [・・・・]」（IV, 391）



他にも次のような交流が記録されている。

一度ドイツ人を見てみたいと隣村からやってきた百姓のじいさんがその小さな身体でもって、われわれの中で評判の巨人の一人を相手に、愛想笑いを浮かべるそのゴリアテの鼻先を横目で見ながら身長を比べて感心している。（IV, 394）

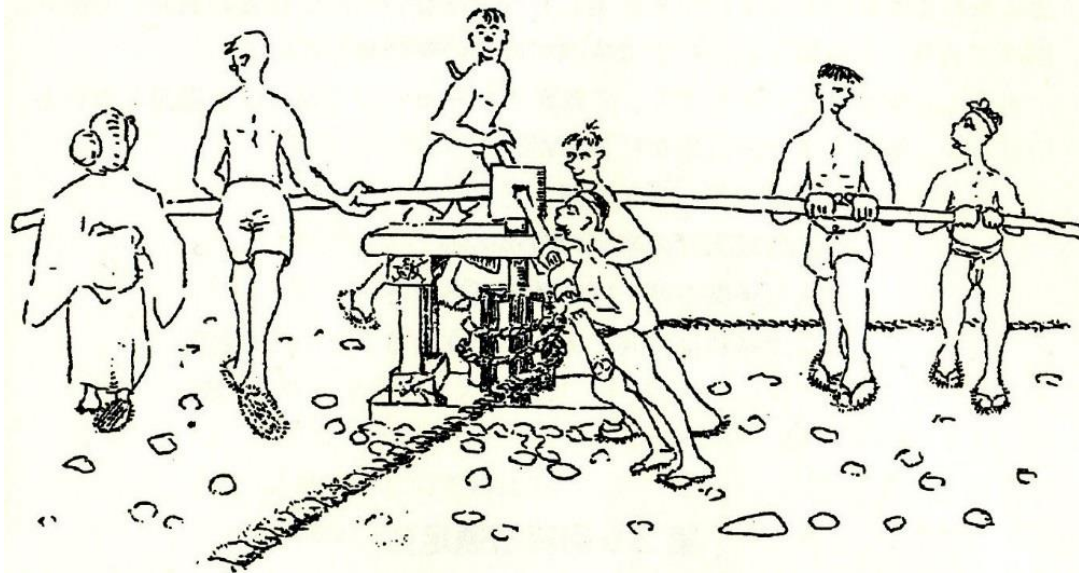
「収容所漫筆 1919年9月30日」という記事では、櫛木に関する記述の中に、「われわれの名レスラー連とがっしりした漁師のつわもの力士たちとの対決」（IV, 503）という言葉も見られる。

時には捕虜と住民が漁労の共同作業をすることもあったことが、次の記録からわかる。

突然、漁師仲間が見張りをしている近くの丘からすさまじい叫び声が上がり、魚群の接近を知らせる。村の男たちは興奮した様子で船に乗り込む。船は全速力で走りながら、網を大きな弧を描くようにおろし、群を包囲する。[・・・・] 網の両端が陸に上がると、網を引き上げる重労働が始まる。それには男も女も子どもも捕虜も力を合わせる。（IV,

394f.)

文章の中にさりげなく「捕虜」という言葉が添えられているが、挿絵にもよく見ると捕虜らしき人物が4名描き込まれている。



こうした記録はほとんど捕虜側のものだけで、残念ながら捕虜の櫛木遠足に関する日本の記録はあまりない。そのわずかな例のひとつを、孫引きのような形になるが以下に挙げておく。

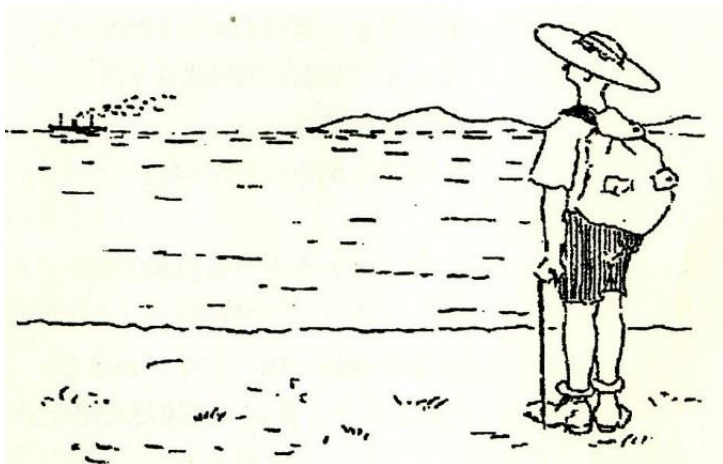
著者はまた、「健在な土地の古老」として知られている富田弘氏（1908年生まれ、会社役員、鳴門市在住）に面接する機会を得た。当時、郡内の明神尋常小学校の児童であった同氏は、次のように語っている。

小学校2,3年の頃、臨海学校が開かれた櫛木海岸で、遠足に来ていた俘虜たちに出会い、一緒に泳いだ。俘虜たちの帰国後、俘虜たちが収容所内で使用していた手製の家具や日用品が払い下げになり、私の家族も大工道具などを買った。当時10歳だった私には、テニスのラケットを買ってくれた。私はそのラケットでテニスのまねごとをしてよく遊んだ。俘虜と一緒に泳ぎ、俘虜が使っていたラケットで遊んだことがきっかけとなって、後に進学した撫養中学では、入学してすぐ軟式庭球部に入部し練習に励んだ。⁷

⁷ 山田理恵『俘虜生活とスポーツ―第一次大戦下の日本におけるドイツ兵俘虜の場合―』不三昧堂出版、1990年。61,62ページ。なお、この富田弘氏は、『板東俘虜収容所―日独戦争と在日ドイツ俘虜―』（法政大学出版局、1991年）の著者である富田弘氏とは別人であり、最初の字も異なっている。

「櫛木 書かれなかった手紙」の最後には、虜囚の身の哀愁を感じさせる一節と挿絵が添えられている。

通りかかった汽船の煙が遠くの水平線上に立ちのぼると、幸せな楽しさが吹き飛び、帰



国と自由へのいつもの憧れが再び襲ってくる。しかし、それでどうなる。捕虜であることが運命によって定められている間は、われわれの進む道にあちこち降り注ぐ日の光を楽しもう。この夏の期間、光明は櫛木であり、その輝きはこれまでのすべてにまさっている。[……]

もう村のざわめきが聞こえてくる

ここには人々の本当の空がある

大人も子どもも楽しげに歓声をあげる

ここでは私は人間であり、そうなることが許される (IV,395)

四行詩の最終行では、捕虜という自分のありようが十全の「人間」とは感じられていないということが前提となっている。とはいえ、櫛木海岸における自然景観の美しさとそこでさまざまな活動、したたかなところもあるが素朴な住民たちとの人間的な交流は、制約の多い抑留生活を送っていた捕虜たちにとって大きな慰めとなったことも、この一節からは感じられる。